蘇芳集

忘年

高橋さえ子

忘年や指揮者征爾のシャツの白

氷る夜の黒鍵ショパン夜想曲

八幡の日向のいろの注連飾

白鷺の律々しき歩み初景色

手水舎の松風匂ふ初明り

合格す筑波全容晴れわたり

キャンパス二月眩しきまでの草の色

はじめから

青山丈

外へ出て夜を見てから豆を打つ

初午の人のぽつぽつ集まりぬ

初午の顔をつめたくして戻る

下へ来て見上げてしかと榛の花

陽炎へ立ち寄つてから行くことに

ぶらんこは帰りに寄らうかと思ふ

はじめから人に離れて梅見かな

柳絮とぶ　金田きみ子

曖昧な来し方行方柳絮とぶ
夕空のひらけるままに辛夷咲く
町川の灯の入りばなの朧かな
ゆく水に佇ちゐて何もかも霞む
老い住みの隠れ家めく蕗の花
粉薬こぼれやすくて彼岸寒
仏燈の炎のうすうすと菜種梅雨

梅白し　上林孝子

新刊の本の手触り春近し
あたたかや人に沿ふごと川に沿ひ
遠きもの皆けぶらへる梅白し
堰落つる水の泡立ち春近し
菜が咲いて夕べたやすく人死せり
日没の前の明るさ白木蓮
花辛夷端正に山暮れにけり

鎌倉　木内憲子

鎌倉に逢ひて草々芳しや
紅梅や白梅の香や師を訪はむ
逝きて師のこゑまざまざと紅椿
紅椿鴉の鋭声かく昏く
鎌倉に三月迎ふ水の音
三月やぼたもち寺へ歩を返し
磐座や鐘の一打も霞みつつ

かくれん坊　小島みつ如

朝採りをかくれん坊の蕗のたう
味噌汁の蕗のたうの香元気出づ
春日射畳の袋菓子ふくれ
吾は老婆はたちの梅の様になる
温む水噴射し家のまる洗ひ
豆撒きを忘れし家の余寒かな
極楽はいま満員と鳥曇

一灯

清水裕子

早立ちの日よ大寒の顔洗ふ
一灯に堂の鎮もる春の霜
初詣戦前よりの池に鯉
花つはや細身に在す洗ひ仏
膝ついて子が写真撮るクロッカス
身疲れの身をふらここの揺れに置く
寂しさは灯すころよ春の雨

紅椿

真保喜代子

春遠からじ枝枝に光満ち
師の御墓囲みて佇てば暖かし
紅椿憶ひ深きは言なさず
大寺の静寂のなかの芽吹きかな
昔から椿きれいな寺なりし
春陰や堂の内なる緋毛氈
岸の辺の二階が映る春の川

椿

冨田正吉

寒椿夢のつづきのやうに会ふ
まなぶたに椿の風を感じをり
気が遠くなるまで椿見てゐたり
たつぷりと椿見て来し夜はカレー
もの思ふ頃の椿を好きと言ふ
ひらがなのやうに椿が落ちてゐる
先生の元気な頃の椿かな

鳥帰る

長沼三津夫

霊山の城址を鳥の帰るなり
鳥帰りゆく船影の動かずに
庭石のそのまま鳥の帰るなり
特急の素通りに駅おぼろなる
潮騒の午後をはるかに鳥帰る
船影のくつきりと鳥帰るなり
夕空の船影を雷近づける